三島市　（通巻　125 号）

郷土資料館だより

Vol.42 No. 2
2019.12.1

箱根八里日本遺産認定１周年記念
「絵図・古文書で見る箱根八里」開催中

●開催期間　令和元年9月21日（土）～12月15日（日）

江戸時代の箱根路は「箱根八里」とも呼ばれ、急勾配で長距離の坂道や箱根関所があるために東海道随一の難所とされていました。一方で歌心を誘う富士山の眺望や様々な名所、茶屋での休息といった旅の楽しみもありました。今回の企画展では江戸時代に記された絵図（パネル展示を含む）や古書・古文書により箱根西坂を中心とした箱根路の当時の情景を紹介しています。

●箱根西坂と坂地区五ヶ新田

徳川家康は関ヶ原の戦い直後、幕府開設以前の慶長６年（1601）から江戸と京・大坂を結ぶ東海道に宿場町を定めました。宿場町には伝馬役（てんまやく）（公的な旅行者や荷物、書状を無償または低賃金で隣の宿場町まで運ぶこと）が課され、街道を使った幕府の交通・情報網が整備されました。また、並木や一里塚が設けられるなど、街道の整備も進められました。箱根路が東海道の一部として多くの旅人に利用されるようになると、地域住民によって石造物なども建てられ、当時の情景を今に伝えています。

幕府による街道整備の一環として、箱根西坂には元和年間（1615 ～ 24）に５つの新しい村、坂地区の五ヶ新田が設けられました。これらの村は幕府主導のもと三島・沼津やその近隣の村からの移住者によって作られ、住民は駕籠舁（かごか）きや茶屋経営など街道を行き来する旅人を相手にする事業に携わりました。

■錦田一里塚

■豆州志稿　寛政12年（1800）秋山富南著

『豆州志稿』は伊豆国の地誌としてもっとも代表的なものである。「以下五村元和ノ後ヨリ稍々二人家出来タル山村之故二村名ノ下二皆新田ノ字ヲ著ク又五村共二夫役ナシ」とある。幕府の街道整備の一環として作られた村々であるため、特例として村ができた当初は夫役と呼ばれる労働力の提供が免除されていたという。その後も三島宿近隣の村々では例外的に助郷役（すけごうやく）（宿場町に課された伝馬役を補助するもの）が免除された。

次回企画展　令和２年１月３日（土）～３月 29 日（日）

企画展「自然と生きる～水・竹・ワラ・石～」

かつて三島に暮らした人々が、この地の地盤・湧水・植生などをいかに上手に生活の中へと取り込んでいたのかご紹介します。“令和”という新たな時代を迎えた中で、郷土のもつ魅力を再発見し、過去と現在の生活の共通点・相違点に思いをめぐらせていただければ幸いです。

■徳川有徳公遺蹟碑　昭和10年(1935)

富士屋旅館（箱根町）の料理人鈴木源内が建てた、山中新田の津田家と徳川有徳公（８代将軍吉宗）との故事を記したもの。概略は以下の通り。

吉宗が将軍となるために紀州から江戸に向かう途中、津田家の営む茶屋で休憩したとき、その対応が丁寧だったことを喜び、「手ヅカラ永楽銭若干ヲ賜ヒテ之ヲ賞シ」た。その後もここを通るたびに立ち寄り永楽銭を与えたという。この故事により津田家は「永楽屋」を称した。

津田家は山中新田の住民で、山中新田と箱根峠との間にあった何軒かの茶屋のひとつを営んでいた。また、村役人を勤めるほどの有力な家で、紀州藩と継続的な関係（藩に出入りの業者として商売をしていたか）を築いていた。

●永楽屋の由来について

来館した方からひとつの質問をいただきました。それは、吉宗が将軍になった頃には永楽銭の使用は幕府によって禁じられていたのではないか、これから将軍になろうかという人がその禁を侵すだろうか、というものです。

確かに、当時は幕府が鋳造した「寛永通宝」の使用が奨められ、中国の貨幣である「永楽銭」の使用は禁止されていました。また、津田氏の書き残した「紀州御由緒記」には、紀州公を茶屋で接待した後「三島駅迄御供」を仰せ付けられ、「御銀銭三銭拝領」したとあります。紀州公から賜ったのが永楽銭であるとは明記されておらず、また、通行の向きも碑文とは逆になっています。このことからは永楽銭そのものをもらった、という説は否定されます。

吉宗の時代から百年以上前には豊臣秀吉が「永楽金銀銭」という永楽通宝を模した金・銀銭を、通貨ではなく賞賜用のメダルとして作らせていたそうです。吉宗がいち茶屋に過ぎない者に百年前に作られた貴重な金・銀銭を与えたとは考えにくいので、銀製の貨幣を模したものを「永楽銭」と称して褒びとして与えた、ということかもしれません。当時の人々は「永楽」という言葉に縁起のよさを感じていたそうです。

ただし、江戸時代には幕府の禁令が厳密には守られていないという事例が多々見られたようなので、休憩の代金としてではなく、つまり通貨としてではなく、褒びの品として永楽銭を与えた可能性は否定できません。郷土資料館では平成 30 年度に津田家に伝わる江戸時代の古文書の寄贈を受けています。今後、この文書群の調査によって新たな発見がありましたら、本誌上などでお知らせします。

収蔵品展「バック・トゥ・ザ・ミシママチ！」報告

●開催期間　平成 31 年４月 27 日（土）～令和元年９月１日（日）
●展示資料数　75 点　●入場者数　22,220 人
●関連事業　クイズラリー（楽寿園との連携企画）５月１日（水）～２日（木）参加者合計：319 人

楽寿園の入園者や当館への来館者が増える春から夏休みの期間に合わせて、収蔵品展「バック・トゥ・ザ・ミシママチ！」を開催しました。江戸時代から、「三島町」と呼ばれた明治～大正時代にかけての三島がどんな街だったのか、当館の収蔵品を通してタイムスリップ気分で体感してもらおうという趣旨のもと、江戸時代の浮世絵や絵図、三嶋暦、明治時代に描かれた小松宮ゆかりの杉戸絵などを展示しました。

今年度はゴールデンウィークが例年より長い 10 連休だったこともあり、市民のみなさまだけではなく多くの観光客の方も来館され、三島の歴史や文化を広く伝える機会となりました。

郷土資料館ミュージアム・フェスタの報告

●開催日時　令和元年９月 29 日（日）10 時～ 12 時・13 時～ 14 時半
●開催内容　・ドングリとあそぼう　・楽寿園の溶岩ツアー
・何かな？不思議な石たち　・楽寿園ストーン・ラリー
・ブンブンごまをつくろう　・牛乳パックで竹トンボをつくろう
・おじいちゃん・おばあちゃんの昭和を楽しもう！～昔のくらしぶりを“回想”～
・くずし字スタンプでシオリづくり　・昔の“あいうえお”であそぼう
・みしまの歴史クイズ
・スタンプあつめて特製ステッカー or 三四呂人形絵葉書をゲット！
●参加人数　163 人　●当日のボランティア参加者　40 名

郷土資料館ボランティアの全体会での提案がきっかけとなって本年度初開催に至ったミュージアム・フェスタは、盛会の中で無事終了を迎えることができました。開催前日までは天候が不安視されましたが、当日は終日快晴に恵まれ、多くの親子連れで賑わいました。参加者の６割以上が５種目以上のイベントに挑戦し、本フェスタのキャッチコピー“つくって！まなんで！楽しめる！”のとおり、「次はあっちへ行こう」とお父さんの手をひっぱってフェスタを満喫する小さな参加者の姿が見られました。

ドングリとあそぼう
楽寿園で採れたドングリに色をぬり、自分だけのコマやネックレス、ストラップをつくりました。

何かな？不思議な石たち
パネルに掲示された市内の石造物の写真を見て、名前をあてるクイズです。馬頭観音や六地蔵の特徴を観察しました。

おじいちゃん・おばあちゃんの昭和を楽しもう！
昭和のお茶の間の様子を再現。黒電話をかけたり、布オムツを赤ちゃんの人形に巻いてみたりしました。

牛乳パックで竹トンボをつくろう
牛乳パックを使って竹トンボをつくりました。羽部分にデザインを描いたあとは、実際に飛ばしてみました。

昔の“あいうえお”であそぼう
絵が描かれたカードと、くずし字が書かれたカードとを対応させるゲームです。ヒントをもとに一生懸命考えました。

みしまの歴史クイズ
３階常設展示室で三島の歴史クイズにチャレンジ。展示資料をじっくり観察しながらクイズに取り組みました。

ボランティアスキルアップ研修 －遠州屋見学会－

●開催日時　令和元年９月４日(水)、５日(木)　13:30～15:30
●見学地　遠州屋染店　●参加者　合計７人（9/4　5人、9/5　2人）

郷土資料館前に設置していたのぼりがくたびれてしまい新たに発注することになったため、ボランティアの方々に呼びかけてその制作過程の見学会を開催しました。今回、のぼりは「防染（ぼうせん）」という技法で制作していただき、その工程を見学しました。加えて、技術の難しさや昨今の染物業界について等のおはなしを聞かせていただいたり、渋紙でつくられた古い型紙を見せていただいたりと有意義な時間が過ごせました。

詳しい工程については次頁に掲載します。

三島の染物 －遠州屋染店－

■遠州屋染店

かつて三島では湧き水の川を利用して染物業が盛んにおこなわれていました。昭和2年（1972）の三島には紺屋（こうや）（染物屋）が22件あり、分業体制で染物を仕上げていました。下絵師・糊付け屋・染物屋の順にまわり、染められた後、湧き水の流れる水路にさらして糊を落とします。

現在、三島に残る紺屋は明治元年創業の「遠州屋染店」一軒のみです。こちらでは下絵から仕上げまでの全ての工程を行っています。

屋号の「遠州屋」は、先祖が遠州地方出身であることに由来します。遠州地方は打ち上げ花火と染物の産地であり、初代は農業の傍ら夏は花火、冬は染物屋で働き、毎年三島の町に打ち上げ花火の技を競いに来ていたそうです。そうして毎夏、三嶋大社に花火を打ち上げに来ていた初代は、三島の水に惚れ込みこの地に腰を据え、明治28年（1895）48歳で三島の町に骨を埋めました。現在、そのワザは五代目、そして六代目へと受け継がれています。

■郷土資料館のぼり作成の工程

前頁にて報告したボランティアスキルアップ研修で見学させていただいた工程を紹介します。

今回は「防染（ぼうせん）」という技法で染めていただきました。「防染」とは布の一部に糊などを付着させて染液がしみこむのを防ぎ、他の部分を染色して模様をあらわす技法です。このほかに遠州屋さんは「注染（ちゅうせん）」「シルクスクリーン染」といった技法でも染物を行っています。

①下絵づくり、型づくり

下絵をパソコンにて作成、型紙を切り出します。古くなったのぼり（20年前に今回同様遠州屋さんへ依頼）があったため、それを元にデザインしていただきました。

②糊置き

文字や輪郭など白く残したい部分に糊を置いていきます。

糊置きには、絞り袋を用いて糊を引く「筒引き」と、生地に型をのせてヘラを使って糊を置く「型糊置き」の２つの手法があります。

使用する糊は「防染糊」。これはもち米の粉と脱脂した米糠、石灰を団子にして煮て、こねたものです。糊は薄いと染料が透けて白地がきれいに残らず、厚いと乾かないので均一に伸ばしていきます。

六代目による型糊置き

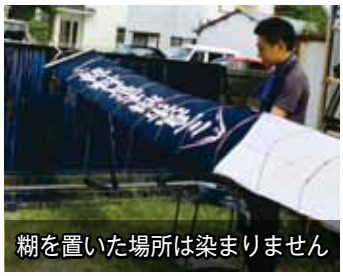
以前も当館ののぼりを手掛けた四代目による筒引き

③ふのりを塗る

糊置きが終わった生地を伸子（しんし）張り（和服の洗濯法である洗張りの一種）し、裏からふのり（海藻の一種、天然糊料）を塗ります。こうすることで染めの時に裏から糊を置いた部分に染料が染みるのを防ぎます。塗り終わったら、裏から古い包丁等でひっかくようにこすり、繊維の中までふのりを浸透させます。

④染め

糊が乾いたらいよいよ染めに入ります。刷毛でムラが残らないよう一息に染め上げ、一晩乾かします。



糊を置いた場所は染まりません

⑤糊を落とす

翌日、工房に隣接する桜川のきれいな水で糊を流し落とします。しっかりと流し落とした後、もう一度干して乾燥させます。

⑥仕立て

染め上がった生地をのぼりとして仕立てます。

生地は裁断、縫製され、白いチギレ（ポールに通すわっか）もつけられました。

⑦完成

今回、のぼりは遠州屋六代目によって染めていただきました。今まで郷土資料館の入口を彩ってくれていたのぼりは平成11年に四代目が手掛けてくださったものです。その工程の詳細については平成12年3月発行の郷土資料館だより66号に掲載しています。郷土資料館2階常設展示でも当時の写真と共に紹介しています。

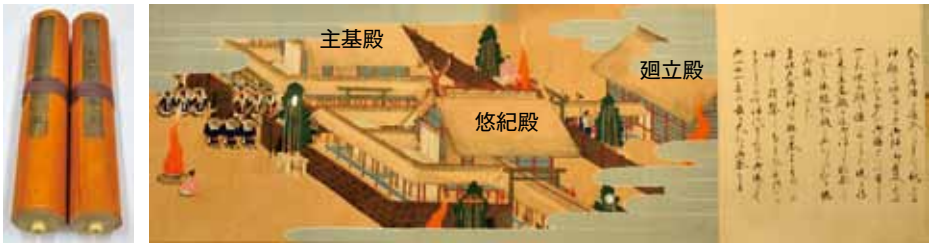
以上の作業工程は大まかな部分は前回と変わりません。しかし、以前は手作業でやっていたデザイン等の工程にパソコンを使用したり、型に金属製のメッシュを使っていたりと細かなところで変化がありました。

三嶋大社の古文書を読み解く　8

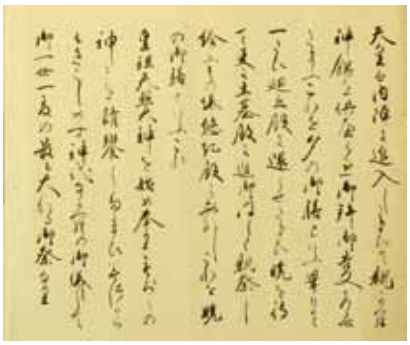
◆今上天皇御即位大嘗祭絵巻～大正の御大礼～

折しもこの秋は天皇陛下御即位に関わる御大礼が執り行われました。御大礼とは、天皇即位に関わる儀礼のなかで最も重儀とされる「即位礼」と「大嘗祭」を中心とした諸儀礼を総称したもので、広く奉祝行事などをも含んで御大典とも称しています。「即位礼」は皇位につかれた天皇が、内外に即位を宣言する儀式。「大嘗祭」は即位された天皇が初めて行う新嘗祭で、大嘗宮を造営し、より大規模に新嘗の祭を行う、一代に一度の最も重儀な祭祀です。

今回は三嶋大社所蔵の資料から、御大礼ゆかりのものを一つご紹介します。「**今上天皇御即位大嘗祭絵巻**」と題する二巻からなる絵巻物です。二巻のうち一巻は「**今上天皇御即位礼絵巻**」、もう一巻は「**今上天皇大嘗祭絵巻**」と題箋が附されています。ここに記された今上天皇は大正天皇のことで、この絵巻は大正４年（1915）に行われた大正天皇の御大礼にまつわる作品です。どちらの巻も10㍍前後の大作で、詞書と絵を交互に配し、即位礼と大嘗祭の諸儀・諸祭祀を順を追って説明していて、通覧することで、次第のあらましがわかるようになっています。



▲今上天皇御即位大嘗祭絵巻の外観（左）と一場面（右）


▲詞書　　読み下し▶

天皇は内陣に進入したまひて、親から神饌を供へられ御拝御告文あらせたまふ。これを夕の御膳といふ。畢りて一たひ廻立殿に退らせたまひ、暁を待て更に主基殿に進、御同しく親祭し給ふ。その儀悠紀殿におなし。これを暁の御膳といふ。これ皇祖天照大神を始め奉りもろもろの神々を請饗したまひ、みつから もきこしめす、神代なからの御儀にして御一世一度の最も大なる御祭なり

さて、**写真は大嘗祭絵巻の一場面**。詞書に次いでメインの祭祀が行われる大嘗宮が描かれています。祭祀の様子は秘儀のため描画されていませんが、詞書にみえます。漢字から平仮名に変わる中間の様な文字、変体仮名が多いですが、読み下しの文字と照らし合わせると、おおよその文字は追えると思います。天皇は、廻立殿で潔斎し装束を整え、夕刻後に悠紀殿にて、未明に主基殿にて祭祀を行います。皇祖である天照大神の他、諸神に神饌を奉り御告文を奏し、親らも食す（きこしめす）ことが記されています。

悠紀と主基という耳慣れない言葉が出てきましたが、大嘗祭に際しては、国内を東西に分け、東の地域を悠紀地方、西の地域を主基地方とし、それぞれの地域で指定された斎田から収穫される新穀が、神饌として奉られます。悠紀殿では悠紀地方の神饌が、主基殿では主基地方の神饌が御供えされるのです。

この絵巻物、発行は御即位記念協会となっています。会長はこの時貴族院子爵議員の清岡長言という人物。清岡は御大礼に関わる知識の教化普及に尽力し、大正天皇の侍従職も務めます。絵巻全体の編集校訂は、有職故実と皇室行事に通じ、この時大礼使事務官であった多田好問が、詞書制作と筆書は、国文学者であり歌人としても著名で、この時宮内省臨時編修局で編修の任にあった池辺義象が担当しています。絵画制作は歴史画を得意とする吉崎北陵が担当し、補助として小堀鞆音・村田（邨田）丹陵・関安之輔（保之助）ら、有職故実等に詳しい著名画家も参加しました。その原画をもとに彫師、刷物師、巻物製作の大経師らが、木版刷り着色の絵巻物として丹念に仕上げました。頒布用の刷り物ながら贅沢な顔ぶれによる制作で、大変出来の良い作品となっています。

（三島市郷土資料館運営委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館　学芸員）

※令和２年３月22日まで三嶋大社宝物館にて公開しています。

三島の歴史とジオポイント 17

―― 劔刀岩床別命神社 ――

社名は「ツルギタチ イワトコワケノ ミコト神社」と読みます。鎮座地は三島市谷田 293 番地です。

神社および周辺の山地には、箱根火山の活動前期（約 27 万年前）に流出した海の平火山体の安山岩質溶岩が分布し、その上を箱根新規軽石流（約6．5万年前）が覆い、最上部には、主に富士火山起源のローム層（風化した火山灰）が堆積しています。神社の前面には夏梅木（なつめぎ）川の谷底平野が広がり、弥生時代以降の遺跡が多数存在し、特に古墳時代以降は山際に集落が作られ続けています。神社北側の山地には、かつて多数の古墳が存在しました。海の平溶岩の節理（割れ目）のあちこちから清水が湧き出し（地下水の年齢は約 15 年）、生活用水・農業用水として利用されてきました。

本社は、国立遺伝学研究所がある台地に続いていましたが、人工的に削られ孤立丘状に見えます。

劔刀岩床別命神社の石鳥居

祭神は劔刀岩床別命と日本武尊（後に合祀）です。延喜式神名帳に載る古社と考えられ、文亀年間（1501 ～ 1503）以降の棟札が残っています。社名は、嶽座（たけくら・竹倉）の劔なす石床から流れ出る清水に由来するとされています。ジオ的に言えば、海の平溶岩の節理から湧水があるので、「神様が人々のために、劔刀で岩床を割り、清水を湧き出させた」と考えられます。

神社の石鳥居は長岡凝灰岩上部層製（伊豆の国市北江間産）です。同材を使った石鳥居は三島・田方地域の多くの神社にありましたが、大正 12 年の関東地震や昭和 5 年の北伊豆地震で大半が倒れ、柱部分だけが境内に残されている場合が多く、現存する鳥居は当社のほかには、三石（みついし）神社や伊豆の国市の守山（もりやま）八幡神社など僅かです。玉垣は花崗岩製です。

鳥居脇にある一対の石燈籠は、明治 5 年に五穀成就を祈願し奉納されたものです。全体が長岡凝灰岩上部層製ですが、2 基ともに火袋は作り直してあります。北伊豆地震で倒れ粉砕したのでしょう。

長岡凝灰岩上部層製の参道の、階段途中にある一対の石燈籠は、昭和 55 年に奉納されたものです。もろい凝灰岩製です。黒雲母が目立つことから、産地は伊豆ではなく、浜松市以西の可能性が高いです。

本殿・拝殿と奉納相撲場

社域一帯は「並木遺跡」と呼ばれ、古墳時代から古代にかけての遺物が散在していました。

境内には奉納相撲場があります。昔は多くの神社にありましたが、今は珍しいです。昭和 10 年奉納の手水鉢は安山岩製です。

本殿のほか、金毘羅・津島・秋葉・稲荷社などの境内社も祀られています。これらの社殿の基礎は大井凝灰角礫岩（沼津市大平産）や長岡凝灰岩上部層です。

古墳時代から現在まで、神を祀り続けたと思われる本社は、市内でも貴重な神社です。ぜひ大切に守り続けていただきたいものです。

（三島市郷土資料館運営委員・増島淳）

郷土教室の報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる郷土教室（体験イベント）をボランティアさんと一緒に開催しています。2019年７月から10月までに行った事業をご紹介します。

日程	郷土教室	内容	参加者
７月　６日（土）	江戸時代の三島宿	旅人風衣装の体験と展示ガイド	28人
７月31日（水）	昔のあそび	ブンブンごま作り、コマ・けん玉遊び	57人
８月　３日（土）	クラフト作り	楽寿園の木や枝を使った工作	60人
	機織り体験	裂き織りの体験（講師：杉山洋子氏）	９人
８月21日（水）	楽寿園の自然	身近なものを使った噴火実験	60人
８月22日（木）	紙漉き体験	和紙を漉いてハガキを作る（協力：三島ゆうすい会）	78人
９月　７日（土）	昔のあそび	ブンブンごま作り、コマ・けん玉遊び	130人
９月21日（土）	江戸時代の三島宿	紙芝居の上演と展示ガイド、旅人風衣装の体験	11人
10月　５日（土）	江戸時代の三島宿	旅人風衣装の体験と展示ガイド	48人
10月12日（土）	楽寿園の自然	ドングリ工作と葉っぱの拓本作り	台風のため閉館

寄贈資料の紹介

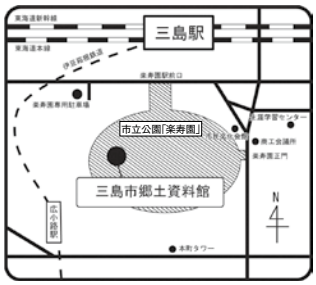
2019年７月から10月までに、次の方々から貴重な資料をご寄贈いただきました。お礼申し上げます（お名前の掲載を希望されない方は、「三島市」等としてあります）。

寄贈者	資料名	点数
三島市	氷まくら（昭和30年代使用）	１点
加藤　昭寅氏	複製三四呂人形	１点
㈲山本ミシン商会	BROTHER社製足踏み式ミシン（本体部分、昭和25年頃）	１点
熊澤　英治氏	レコード（木製ケース付）	18点
杉山　紀彦氏	田方郡中郷村大場耕地整理組合確定図（縮尺600分の１）、田方郡中郷村大場南部耕地整理組合確定図（同前）	2点
水口　椿夫氏	『広重東海道五十三次』（復刻）	1式
トッパン・フォームズ株式会社	『東海道五拾三次絵巻』上下巻（ボストン美術館コレクションの複製）	1式
新潟県	日本赤十字社木杯（木箱付、小松宮彰仁親王関係資料）	3点
三島市会計課	収入役事務引継報告書（昭和８年～平成７年）	2点

郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228　FAX 055-971-6045

開館時間　午前９時～午後５時（４月～10月）
　　午前９時～午後４時30分（11月～３月）
休 館 日　毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、年末年始
入 館 料　無料（ただし楽寿園入園料として別途300円かかります。15歳未満は無料、学生は学生証提示にて無料。）



三島駅（南口）から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.42 No.2（第125号）
発行日 令和元年12月１日（年3回発行）
編　集　三島市郷土資料館
発　行　三島市教育委員会
E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL : http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/